ヒラメ種苗生産試験
（要　約）

福田　慎作・田村　真通・中田　健一・吉田　秀雄・五十嵐　照明

将来、ヒラメの栽培漁業化を図る為に必要なヒラメ種苗量産技術の開発をめざすと共に、放流試験用の種苗生産試験を実施したのでその概要について述べる。なお、詳細は「昭和62年度放流技術開発事業報告書日本海ブロックヒラメ班」（昭和63年3月、青森県水産増殖センター外8機関）として報告した。

結果の概要

1. 種　苗　生　産

(1) 親魚養成における加温時期を例年より10日早い1月19日から開始したことにより、採卵の早期化（約2週間）ができた。

(2) 3回の採卵で得た654,000尾のふ化仔魚を用い、平均全長23.1㎜の稚魚232,000尾を生産した。その間の歩留りは35.5％であった。

2. 中　間　育　成

(1) 種苗生産で得られた平均全長23.1㎜の稚魚232,000尾と日栽協宮古事業場産の平均全長20.4㎜の稚魚140,000尾を用い、7月17日から10月30日の間に25.0～157.8㎜サイズの稚魚229,398尾を生産した。歩留りは61.7％とこれまでで最も良好な結果となった。

3. 体　色　異　常

(1) 体色異常個体の出現率(放流時)は、有眼側では年々減少傾向にあったが本年は38.9％と昨年より高かった。また、日栽協宮古事業場産については7.1％であった。無眼側ではほとんどの個体に何らかの色素沈着がみられた。その部分はg、ℓタイプが高率で、昨年と異なった傾向を示した。

(2) 全長100㎜種苗を用い、敷砂飼育による体色異常の変化状況を写真撮影して観察したところ、有眼側は飼育後213日でほとんどの個体に白化面積の縮少が認められた。一方無眼側では378日経過しても、まったく変化は観察されなかった。